第8号 2010.1.1

アンデレ便り

2010年を迎えるにあたり

一昨日、１２月２０日は下関の教会を訪れましたが、地方の教会についていえば、この教会が今年度最後の巡錫となりました。今年は教区内２５教会を巡錫したことになりますが、皆様の暖かいおもてなしを心から感謝申し上げます。

地方信徒の嘆きと信徒奉仕職

２００９年もあと僅かとなり、この年に起こった様々な出来事に思いを馳せる時期となりました。来年早々開催される受聖餐者総会に向けて、特に各教会牧師は、２００９年の教会活動を振り返り、その評価と反省を十分していただき、総会説教や開会演説で、これからの宣教活動に対する方向性や抱負を述べる必要があると思います。

９９％の教会では巡錫のあと会食がもたれます。多くの教会では、信徒の方々との歓談のなかで、教会の活力が低下しているという嘆きが聞かれます。特に定住牧師がいない教会は深刻です。信徒の方々が必死になって教会の活動を支えておられることがひしひしと伝わってきます。平均的に見て、司祭が主日に聖餐式をあげるのは月２回で、残りの主日は、信徒が交代で御言葉の礼拝を執行し、証しをします。問題は個々の信徒に対する、あるいは教会を訪ねてきた人たちに対するケアーが、牧師が不在の場合、非常に難しくなっているという実情です。従って、教役者を送ってくれないと教会の存続さえ脅かされる、という危機感を多くの信徒は抱いているのです。

日本の聖公会が発足して１５０年経ちますが、聖公会の特色の一つに、聖職と信徒による宣教への奉仕職という両輪があります。これがうまく連動することによって教会活動が活発化しますが、現実には教役者不足により、聖職による宣教活動低下を招いております。反面、定住牧師不在によって浮き彫りにされた、牧師依存体質からの脱却が求められているのです。同時に、まだ掘り起こされていない賜物が教会内に多く存在します。その発掘が求められるのです。

忘れてはならないのは、私たち全てはキリストに連なっている枝であるという事実です。そのキリストは、私たちのために十字架に苦しみ、死なれたのです。私たちの賜物を教会のために活かすという基本的な姿勢は、キリストに求められます。自分の命を犠牲にして私たちを活かして下さっているという感謝の心が、奉仕の姿勢にあらわれるのが教会です。他人に報いを求めず、キリストのために尽くすそうとする姿勢を、神は由とされるのです。

へりくだりの人生

聖歌８５番、８６番の歌詞は、後に米国マサチューセッツ教区の主教になったフィリップ・ブルック司祭が、明治維新の年１８６８年、ベツレヘムを訪れたときの感動を歌ったものです。

特に三番目の歌詞に注目したいのですが、直訳では「罪の世にあって、従順な魂を持つ者のみが救い主を受け入れる。愛するキリストがその人の心に入られる」となります。

私も約２０年前、ベツレヘムの降誕の場所に行きましたが、そこは洞穴で、狭くて暗いトンネルのようなところを、かがみながら降りていきますと、誕生の場所に至ります。この場所に入ることのできる人のことを、ブルック司祭は「従順な魂を持つ者」と表現したのです。キリストは私たちの心に入るために、謙遜になって身をかがめました。これはキリストの、隣人に対する愛の故でした。私たちもまた、キリストの命に与るために、身をかがめなければならないのです。

救い主キリストと相まみえるために、謙遜な心を保つ２０１０年でありますよう、神の祝福と励ましをお祈り申し上げます。

カンボジア事情

今年 10 月、東アジア主教会会議の最中、プノンペン市郊外にある、シンガポールの聖アンデレ大聖堂のＨＯＰＥ基金(Humanitarian Outreach for Peace on Earth)の一環として設立されたホテル学校・養護施設を見学しました。

若者に希望を

養護施設の目的は、6 才から 18 才の孤児、極貧化にある家庭の子どもたちなど 120 名を収容し、寝食を共にしながら、自立までの間保護することです。つまり、ストリート・チルドレンを防止する一環として、この施設の重要性があるわけです。

ホテル学校も全寮制で、約 150 名の男女学生が学んでおります。1 年目は月曜日から金曜日まで、英語をみっちり勉強し、2 年目には、ホテルのホスピタリティー学習と実習、コンピューターソフトの習得が待っております。戦後復興事業の一環として位置づけられているこの施設は、カンボジアが、観光立国を将来目指すために求められる人材育成をこの施設は担っているのです。この２年、脱落者は皆無で、10 数名の学生が、毎年キリスト教に入信しているそうです。勉強への取り組みは真剣そのもので、若者が職を手にすることが非常に困難なカンボジアにあって、卒業証書を手にしない限り、自分の将来を切り開くことができない、との切実感がひしひしと伝わってきました。

内戦の悲劇とキリストの福音

カンボジアは、1975 年、ポル・ポト率いるクメール・ルージュ（カンボジア共産党）が勢力を伸ばし内戦が勃発、1979 年にはベトナム軍が侵攻し占領、1991 年に至り、ようやく和平協定が成立、平和が訪れました。この間、約 150 万から 200 万人の人たちが飢餓や強制労働、内線で亡くなり、あるいは、反政府勢力者として殺害されていったのです。

会議 2 日目の聖餐式で、カンボジア人のミュン・ヒー司祭が説教されました。幼い頃にはすでに共産党支配下であり、内戦が始まると共に、両親と別れ別れになりました。彼の出身地であるタケオでは、多くの人たちが飢えに苦しみ、司祭は路上にころがっている人間の腕を見たと言います。終戦を迎えましたが、両親は自分の家に帰ってはきません。しばらくして、生き残った村の人が、両親が殺されたことを告げました。ミュン・ヒー司祭は、絶望のどん底に落とされましたが、キリストの福音に触れ、献身したのです。説教の途中、感極まって声を詰まらせてしまい、主教や主教夫人たちの涙を誘いました。

約 30 ％のカンボジア人は、戦争による心の傷を持っているといわれております。この人たちにキリストの慈愛と癒しを伝えることの重要さを痛感したのが、今回の主教会でした。